

國學院大學學術情報リポジトリ

北奥方言の昇り核の由来

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 善道 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000957

北奥方言の昇り核の由来

上野 善道

キーワード：北奥方言、アクセント、昇り核、下げ核、北奥祖体系

1. ねらい

北奥（東北北部）方言の「昇り核」は「下げ核」に由来すると見る拙案について、旧稿を補訂した津軽方言も含めて、より具体的な形で再論する。併せて、昇り核は「上げ核」に由来するとする木部暢子（2008）と児玉望（2017）の説を検討する。

2. 昇り核

具体例として、すでに何度も言及しているが、私自身の岩手県雫石町方言（以下、適宜、雫石方言と略記）と、青森県青森市・弘前市方言（それぞれ青森方言、弘前方言とも略す）を改めて取り上げる。青森市と弘前市は事実上同一アクセント体系なので、まとめて津軽方言と呼ぶことにする。これらの方言に関しては、拙論（1975, 1976b, 1977, 1980, 1986, 1989, 1991, 1992, 1993, 1996, 1999, 2006, 2009, 2011, 2012, 2013, 2017a,b,c, 2018）などを参照されたい。本稿の考察対象ではない分節音（語音）は、すべて標準語表記で示す。

2.1 雫石方言

雫石方言は(1)のようになっている。ここに、[は上昇、] は下降、]] は拍内下降を意味し、「.」はそこで言い切る態勢（後に続ける態勢ではない形）で発音した場合、「…」は後に何か言葉を続ける態勢で発音した場合の音調であ

る。それぞれを「言い切り形」、「接続形」と呼んでいる（「言い切り形」に対しては「言い切らず形」であろうが、長くなるので4モーラ語形に揃えてある）。これは、あくまでもその「態勢」（つもり）で発音しているか否かに関わるので、続けるつもりで言い淀んでしまい、実際には言葉が続かない場合でも接続形が出る。聞き手も同じ方言を共有している場合は、接続形が出てくれば、話し手はまだ話し続ける意図があると分かるので、特に発言の機会を窺っているのではない限り、通常であれば黙って話を聞き続ける。この「態勢」は外からは見えないので、他所者の調査者には、馴れないと捉えにくい面がある。なお、言い切り／接続の別と、単独形／助詞付き形とは独立で、それぞれの組み合わせが可能である。(1)の「柄もある」などは、助詞付き接続形の表示も兼ねてある（他の音調型もあるが、後述）。「ある」は「猿」と同じ型である。以下、型の見出しの数字は、「拍数-核の位置」を示す。

(1) 雫石方言

型	単独言切	単独接続	助詞付言切	助詞付接続+ある	音韻表記
1-0	柄.	柄…	柄モ.	柄モ[ア]ル.	/柄=/
1-1	[絵].	[絵]…	[絵]モ.	[絵]モア[ル].	/[絵]/
2-0	カゼ.	カゼ…	カゼモ.	カゼモ[ア]ル.	/カゼ=/
2-1	[サ]ル.	[サル]…	[サ]ルモ.	[サル]モア[ル].	/[サル]/
2-2	ヤ[マ].	ヤ[マ]…	ヤ[マ]モ.	ヤ[マ]モア[ル].	/ヤ[マ]/
3-0	サカナ.	サカナ…	サカナモ.	サカナモ[ア]ル.	/サカナ=/
3-1	[カ]プト.	[カプト]…	[カ]プトモ.	[カプト]モア[ル].	/[カプト]/
3-2	イ[ノ]チ.	イ[ノチ]…	イ[ノ]チモ.	イ[ノチ]モア[ル].	/イ[ノチ]/
3-3	オト[コ].	オト[コ]…	オト[コ]モ.	オト[コ]モア[ル].	/オト[コ]/
4-0	トモダチ.	トモダチ…	トモダチモ.	トモダチモ[ア]ル.	/トモダチ=/
4-1	[ウ]ズマキ.	[ウズマキ]…	[ウ]ズマキモ.	[ウズマキ]モア[ル].	/[ウズマキ]/
4-2	テ[ブ]クロ.	テ[ブクロ]…	テ[ブ]クロモ.	テ[ブクロ]モア[ル].	/テ[ブクロ]/
4-3	クダ[モ]ノ.	クダ[モノ]…	クダ[モ]ノモ.	クダ[モノ]モア[ル].	/クダ[モノ]/
4-4	カミナ[リ].	カミナ[リ]…	カミナ[リ]モ.	カミナ[リ]モア[ル].	/カミナ[リ]/

言い切り形を見ると、低平型が1つに、それぞれ1拍だけ高くなる型が拍数分あり、最終拍が高くなる場合は下降調を取っている。かつては、このよ

うな方言は固定的な1拍卓立型とされ、所属語彙を別にすれば、東京方言と同じ体系と解されていた。しかし、それは言い切り形だけを見た場合であって、この方言には別に接続形が存在する。それを見ると、言い切り形で1拍卓立と見た型は、高くなる位置が固定していて、その後は文節の末尾まで高く続き、下降は出て来ないことが分かる。つまり、この方言の弁別特徴は、どこから高くなるかであり、低くなる特徴は言い切り形においてのみ現われるもので、かつその位置は指定された高くなる拍の直後と決まっている。語末が高くなる場合は、その直後がないので、言い切りではその中で下降調を取る。

ここから、この方言は、東京方言のような次を下げる「下げ核」(//)ではなく、そこから昇る「昇り核」(//)であることが分かる。その昇り核の有無と位置によって拍数より1つ多い区別をする体系である。これを $P_n = n + 1$ と表わす。アクセントを問題にしていない場合と区別するために、無核型を明示するときは /=/ を付す。東京方言は、やはり $P_n = n + 1$ の体系ではあるが、下げ核の有無と位置によって弁別される。

この核の性質の違いが、以下に示すいくつかの現象の違いとして現われる。これらの違いも、昇り核が下げ核に由来するところから生じたものと考えている。

東京方言の下げ核はその直前の高さよりも低くなる形で何度でも実現（連続下降）するのに対して、雫石方言の昇り核は、直前が高く終わっている場合はそのままの高さで続き、前よりもさらに高くなる連続上昇は起こらない。

また、東京方言の（原則として2拍目で起こる）上昇は単語の特徴ではなく、その上に被さる「(音調)句」の特徴として「句頭」を示すのに対して、雫石方言の（上昇の直後に起こる）下降は、やはり単語ではなく句の特徴であるが、「句末」を示すという対照的な性格を持つ。東京方言では、句頭の上昇がそれまでの話の流れを断ち切ってそこに意味上の焦点を当てる機能を持つが、雫石方言では句末の下降によって続いていないことを示して話の流れを断ち切り、そこに意味上の焦点を当てる。それぞれ、文頭は句頭、文末は句末になるが、これはいわば自動的に起こるのに対して、意図的に行なう非

文頭での上昇、非文末での下降は積極的に意味に関わる。ここでは、東京方言の文頭以外の句頭を「|」で、雫石方言の文末以外の句末を「|」で表記することにする。ただし、焦点が当たっている場合は文頭、文末にも付す。加えて、東京方言では句頭の上昇は無核型にも一律に掛かるが、雫石方言では句末の下降は有核型にのみ適用される（無核型は低平調なので、言い切り／接続の区別がない）、という違いもある。雫石方言の下降は、昇り核の上昇と連動しているのである。

その他に、東京方言では句は文節（|で示す）の制約を受けないが、雫石方言では「上昇後の高い音調の連続は文節末まで」という形で文節が関与するという違いもある。ただし、主語／目的語＋述語、副詞＋述語、形容詞＋名詞など、密接な繋がりを持つ文節連続は、その前部要素が焦点となるのが一般で、その時はその文節連続がまとまって句末の単位となる。もとより前部要素が有核の場合である。句末文節連続の場合は、[ズツ|トイ]－モノ|]（ずっと良い物）など後続文節の上昇もなくなる。

以上のことを(2)と(3)の「雨の降る日は天気が悪い。」の例文で示す。そのすべての単語のアクセント核の位置は、東京方言も雫石方言も同じである。両方言とも「日」は単独では無核型だが、前に形容句の来る「～の日」となると核をもつ特異な振る舞いをする。句の切り方は他にもあるが、ここは代表例に留める。東京方言については詳述の必要はなかろうが、(2b)は「天気が」、(2c)では「天気が」と「悪い」に焦点が当たっている。(3)の雫石方言では、文節の切れ目（|）でそれまでの音調がリセットされる。読みやすさを考え、それぞれのあとに、音調だけを取り出したものも表示しておく。

- (2) 東京方言：a. [ア]メノフ|ルヒ|ワテ|ンキガワル|イ。 1句
 b. [ア]メノフ|ルヒ|ワ|[テ]ンキガワル|イ。 2句
 c. [ア]メノフ|ルヒ|ワ|[テ]ンキガ|ワ|ル|イ。 3句

- (3) 雫石方言：a. [アメノ|[フル|[ヒワ|[テンキガ|ワ|ル|イ。 1句
 =[アメノフルヒワテンキガ|ワ|ル|イ。

- b. [アメノ [[フル [[ヒワ [[テ]ンキガ|ワル]イ]. 2句
 =[アメノフルヒワテ]ンキガワル]イ.
- c. [アメノ [[フル [[ヒワ [[テ]ンキガ||ワ[ル]イ]. 3句
 =[アメノフルヒワテ]ンキガワ[ル]イ.

霽石では、昇り核が語頭にある単語が連続する場合は高いまま続くが、(3a)のように2拍目に核のある「悪い」の1拍目のワは普通に続けて言っても必ず低くなる。ここに「文節」が顔を出す。そして、「悪い」は文末ゆえの文末なので、昇り核で上昇したルのあとで下がる。「雨と風の日は～」なら、「風」は無核なので、1句で発音しても[アメト|カゼノ [[ヒワ...、すなわち[アメト]カゼノ[ヒワ...しかない。(3b)は句末文節連続の「天气が(悪い)」に、(3c)は「天气が」と「悪い」の両方に、それぞれ焦点を当てた例である。(3b)の「天气が悪い」では焦点形の「天气」の下降の後には「悪い」の上昇が消え下降だけが残って、東京方言(2b)の後半の句と同じく連続下降が起こる。(3c)の「天气が」「悪い」も東京方言(2c)と同じになる。なお、(3c)は(3b)との対比において「悪い」も焦点になっていることが分かるが、(3a)だとそれははっきりしない。(3a)でそれを明瞭に示す場合は、ワ[ル]イの上昇(と下降)を大きくして卓立するしかない。プロミネンスによる方法である。

焦点のことは、(4)の不定詞と疑問詞の対でよく分かる。(以下、文節境界の印は略す。括弧内に単語のアクセント核の位置を示す)。「誰か」は焦点を受けることがないのに対して、「誰」は必ず焦点をなす。そのため、それぞれの音調を入れ替えた例(a', b')は変である。その意味で、言い切り形とは「焦点形」でもある。(4c)でも、誰と誰が来たかをまとめて聞く場合は、語頭文節の「誰と」は高平らで次に続くが、次の「誰」は焦点形で下降を伴う。それに対して、一人一人の特定を求めて聞く場合は、それぞれに下降のある(4d)になる。参考までに(3)と組み合わせて作った文も掲げる。雨の中、小屋から何か出している人に聞くもので、(4e)は「悪い天気の日にも傘もなしで何か出すの?」、(4f)は「悪い天気の日にも傘もなしで何出すの?」である。このように途中からでも語頭核の単語が連続する部分は焦点語がなければずっ

と高く続くが、その言い切りでは最後は必ず下がってしまうし、焦点疑問詞があればそこで下がり、密に結びつく後続語が有核型だと連続下降が生ずる。なお、この方言では、主格助詞「が」、目的格助詞「を」は一般に用いない。また、質問文のイントネーションは急下降調（\）を取る。

- (4) a. [ダレカ]キ[タ\? (誰か来た?) a' × [ダ]レカキタ\]? (誰か①型、来た②型)
 b. [ダ]レキタ\]? (誰が来た?) b' × [ダレ]キ[タ\? (誰①型)
 c. [ダレトダ]レキタ\]? ((まとめて)誰と誰が来たの?)
 d. [ダ]レト{[ダ]レキタ\}? ((一人一人)誰と誰が来たの?)
 e. ワ[ルイテンキノヒニカサモナシデナニカダ]スノ\? (傘、無し、何か、出す①型)
 f. ワ[ルイテンキノヒニカサモナシデナ]ニダ]スノ\]? (何①型)

旧来のアクセント観では、単語単独を明瞭に発音したものが「型」であり、そこにアクセント特徴がそのまま現われるとされていたが、東京方言でさえそうではなくて、単語としてもつ下降（核）の上に、意味上の焦点を表わす句頭の特徴が被さっているものであり、雫石方言では、単語としての上昇（核）の他に、意味上の焦点を表わす句末の特徴が被さっている。雫石方言では、接続形の方が無標であり、その意味で、言い切り形は「非接続形」とすべきものである。その接続形の存在を知らずに言い切り形にこだわっていたのでは、そのアクセント特徴を見誤ってしまう。

2.2 津軽方言

続いて、青森市・弘前市に代表される津軽方言を取り上げる。

(5) 津軽（青森市・弘前市）方言

型	単独言切	単独接続	助詞付言切	助詞付接続+ある	音韻表記
1-0	[柄.	[柄…	柄[モ.	柄[モア]ル.	/柄=/

1-1	[絵]].	[絵…	[絵]モ.	[絵モ]アル.	/[絵/
2-0	カ[ゼ].	カ[ゼ…	カゼ[モ].	カゼ[モア]ル.	/カゼ=/
2-1	[サ]ル.	[サル…	[サル]モ.	[サルモ]アル.	/[サル/
2-2	ヤ[マ]].	ヤ[マ…	ヤ[マ]モ.	ヤ[マモ]アル.	/ヤ[マ/
3-0	サカナ[ナ].	サカナ[ナ…	サカナ[モ].	サカナ[モア]ル.	/サカナ=/
3-1	[カブ]ト.	[カブト…	[カブト]モ.	[カブトモ]アル.	/[カブト/
3-2	イ[ノ]チ.	イ[ノチ…	イ[ノチ]モ.	イ[ノチモ]アル.	/イ[ノチ/
3-3	オト[コ]].	オト[コ…	オト[コ]モ.	オト[コモ]アル.	/オト[コ/
4-0	トモダ[チ].	トモダ[チ…	トモダチ[モ].	トモダチ[モア]ル.	/トモダチ=/
4-1	[ウズマ]キ.	[ウズマキ…	[ウズマキ]モ.	[ウズマキモ]アル.	/[ウズマキ/
4-2	テ[ブク]ロ.	テ[ブクロ…	テ[ブクロ]モ.	テ[ブクロモ]アル.	/テ[ブクロ/
4-3	クダ[モ]ノ.	クダ[モノ…	クダ[モノ]モ.	クダ[モノモ]アル.	/クダ[モノ/
4-4	カミナ[リ]].	カミナ[リ…	カミナ[リ]モ.	カミナ[リモ]アル.	/カミナ[リ/

津軽方言も、結論から言うと、その音韻解釈は全く雫石方言と同じで、昇り核によって弁別される $P_n = n+1$ の体系である。雫石方言との違いは、まず、無核型が低平調ではなく、言い切り・接続ともに文節末が高くなる。他の例も示すと、柄カ[ラ、柄カラ[モである。有核型は、言い切り形が核の位置から文節次末まで高く続いて、文節末だけが下がる。雫石と違い、言い切り形でも高い部分が連続し得るのである。そして、一番大きな違いは、有核型の接続形において、その文節末に必ず下降が現われて、続く文節が語頭核の場合でもそれを下げ、続く核でそれからさらに下がる点である。この最後の点が、後に考察するアクセント史に深く関わる。

実は、青森市方言に関して、私は接続形とそれに後続する部分の音調把握に見落としていた点があった。Igarashi (2006) と高山林太郎他 (2012) から、それぞれ五所川原市方言、青森市方言について、その有核型の文節末では次の文節にかけて一貫した下降 (∩) が生ずる事実を見落としているとの批判を受けた。この指摘の正しさを、その口頭発表での録音音声、並びに五所川原市方言と弘前市方言の調査¹で私も確認した (拙論2017c: 71-72)。

拙論 (1977: 298) ではサ[ケア]ル (酒ある) とヤ[マ]アル (山ある)、拙論 (1991: 48) ではア[ケァヤ]ツ (赤いやつ) とワ[ケァ]ヤツ (若いやつ)

——原文の実線、破線表記を統一変更——の違いがあることにはすでに記述していた。しかし、私の岩手県雫石方言では、確かに普通はヤ[マ]アルとなるものの、(取り分け、要素に焦点が無く一文全体の可否を問う質問文において)ヤ[マア]ルとマの直後の下降なしでも言え、さらにはアタ[マ](モ)アル、イ[ノ]チ(モ)アル、[カ]ブト(モ)アルも、それぞれアタ[マ(モ)アル、イ[ノ]チ(モ)アル、[カ]ブト(モ)アルとも言え(「も」の有無は影響しない)、もとより「ある」以外でも[ア]メフ[ル]とも[アメフ]ルとも言える(拙論1992: 8-9、また本論2.1節も参照)ことから(ただし、無核型は低平調ゆえサケ[アル、サカナ[アルのみ)、津軽方言でも基本的に同様に違いないと速断し、その思い込みから、また、その点に着目しなくても相互の型の区別は明瞭なので、それ以上の確認と追究を怠っていたのであった。

しかしながら、その下降の存在を認めたあとでも、津軽方言も共時的には「昇り核」の体系であるという解釈に何ら変わりはない。下降は義務的であっても昇り核に連動して現われるもので、下降の位置は決まっています相互に対立をなさないからである。津軽方言の例は、次節で述べるように、昇り核は「下げ核」から変化したものであるという私の仮説(1986: 19, 1992)をむしろ裏付けるもので、元の下げ核の反映を私の方言よりもよく保存しているものと考ええる。

次に、所属語彙について言えば、類別体系は両方言とも同じである。細かい例外はあるものの、大きくまとめれば、1拍名詞は1・2/3、2拍名詞は1・2/3/4・5、3拍名詞は1・2・3/4/5/6・7である。ただし、その中で2-4・5類は、青森・弘前方言は2拍目の母音が広いe, o, aだと/フ[ネ/(舟)、/ア[メ/(雨)で、そこが狭いi, uだと/[アキ/(秋)、/[サル/(猿)と分かれるのに対して、雫石方言では、1拍目が狭く、2拍目が広いときのみ核が後ろにずれる。従って、/[アメ、[アキ、[サル/に対して/フ[ネ/となる。両方言は、3モーラ語でも語頭核(頭高型)は少ないが、その3-6・7類に/[カブト、[キツネ、[クジラ、[スズメ/などの型が「○狭広」(○は任意)の構造、すなわち「○弱○」の単語に出る点は共通する。「○狭狭」か「○広○」の「○強○」の構造では/ク[スリ、ウ[サギ/などの/○[○○/になる。

3. 北奥方言のアクセント史と昇り核の由来

3.1 北奥祖体系からの変化

Uwano (2012: 1430-1432) に雫石方言と弘前方言のアクセント史を描いたが、前節で述べたように、弘前方言の接続形は、言い切り形における文節次末位の下降 (1) が遅れて文節末位にずれたままそこにとどまり続けている事実を反映させる必要がある。その不備を正した私見を、そのポイントとなる部分に絞り、分かりやすく3拍語の助詞なしの例で以下に記す。1～2モーラ語でも、また助詞付き形でも同じことが言える。

まず、雫石方言と津軽方言の祖体系と考えられる〈1〉の段階を想定し、それからの変化を見ていく。〈1〉は1拍卓立型で、無核型は最後拍だけが高かったと考える。〈2〉と〈3〉は、言い切り／接続が分れる段階を示すために、敢えて重複して掲げる。

(6) 雫石方言言い切り形の無核型における上昇の遅れと消失

型	〈1〉	〈2〉	〈3〉
3-0. サカナ	*OO[O >	*OOO =	OOO.
3-3. オトコ	*OO[O]] =	*OO[O]] =	OO[O]].
3-2. イノチ	*O[O]O =	*O[O]O =	O[O]O.
3-1. カブト	*[O]OO =	*[O]OO =	[O]OO.

雫石方言では、〈2〉になる段階で無核型における文節末の上昇が遅れてやがて消え、低平調になった。他は言い切り形では変化が起こっておらず、下降は上昇の直後で生じている。

(7) 雫石方言接続形の有核型における下降の遅れと消失

型	〈2〉	〈3〉	〈4〉	〈5〉
3-0. サカナ	*OOO	= *OOO…	= *OOO…	= OOO…
3-3. オトコ	*OO[O]	> *OO[O]…	= *OO[O]…	> OO[O]…
3-2. イノチ	*O[O]O	= *O[O]O…	> *O[OO]…	> O[OO]…
3-1. カブト	*[O]OO	> *[OO]O…	> *[OOO]…	> [OOO]…

〈2〉の段階ではまだ言い切り形と接続形が同じであったが、その後の〈3〉の段階で両形が分化した。上昇の位置は保ったまま、接続形において下降の遅れ（右方向、語末方向へのずれ）が生じたのである。この段階で、はっきりと「昇り核」と認定されるようになった。ただし、実は、その前にすでに昇り核になっていたからこそ、接続形における下降の遅れが生じたと見るべきもので、〈2〉の段階のある時点ですでに昇り核化していたと考えられる。そしてこの下降は〈4〉で語末・文節末までずれて行き、やがて〈5〉の段階で消えた。

津軽方言では、言い切り形においても下降が次末位まで移動した(8)の〈3〉の段階で昇り核と認定されるようになった。ここでも、〈3〉の段階で言い切り／接続が分化した（(9)も参照）。

(8) 津軽方言言い切り形の有核型における下降の遅れ

型	〈1〉	〈2〉	〈3〉
3-0. サカナ	*OO[O	= *OO[O	= OO[O.
3-3. オトコ	*OO[O]]	= *OO[O]]	= OO[O]].
3-2. イノチ	*O[O]O	= *O[O]O	= O[O]O.
3-1. カブト	*[O]OO	= *[O]OO	> [OO]O.

(9) 津軽方言接続形の有核型における下降の遅れ

型	〈2〉	〈3〉	〈4〉
3-0. サカナ	*OO[O	= *OO[O…	= OO[O…
3-3. オトコ	*OO[O]]	> *OO[O]…	= OO[O]…
3-2. イノチ	*O[O]O	= *O[O]O…	> O[OO]…
3-1. カブト	*[O]OO	> *[OO]O…	> [OOO]…

接続形では(9)の〈4〉への変化が生じた。この有核文節末の下降が今なお残っていることになる。雫石の〈5〉への変化は起こっていない。〈3〉〈4〉とも下降〔〕は弁別的な昇り核〔〕と連動しており、それぞれの位置が定まっています。弁別力はないが、かつての下げ核の痕跡として今も〈4〉のまま保持しているものである。繰り返しになるが、この〈4〉の段階でとどまって下降が消えていない点が雫石方言との違いである。

3.2 本土方言祖体系から北奥方言祖体系への変化

この両方言に共通する〈1〉の段階を「北奥方言祖体系」と呼ぶことにすると、それに至るまでの本土方言祖体系（拙論2006）からの変化は(10)のように考えられる。ここの数字と a, b は「類」を示す（核の位置ではない）。〔!〕は下降式音調の反映としての半下降、〔!!〕は半下降の拍内下降を表わす。中間段階は代表的なところを示した。中には若干違う変種を想定することもできる部分もあるが、大局に影響しない細部にはこだわらない。問題の箇所は後述する。この段階では、言い切り形／接続形の区別はなかったと考える。ここでも分節音の変化は不問とする。なお、2-5のアメは「雨」である。

(10) 本土祖体系から北奥祖体系へ

類	本土祖体系	〈1〉	〈2〉	〈3〉	北奥祖体系
1-1	*[蚊!!]	=*[蚊!!]	>*[蚊]	=*[蚊]	=*[蚊]
1-2	*[葉]]	>*[葉!!]	>*[葉]	=*[葉]	=*[葉]
1-3	*木	=*木	>*[木]]	=*[木]]	=*[木]]
1-4	*[[巢	=*[[巢	>*[巢	=*[巢	→*[巢]]
1-5	*[[齒]]	=*[[齒]]	>*[齒]]	=*[齒]]	=*[齒]]
2-1a	*[カ!ゼ]	=*[カ!ゼ]	>*[カゼ]	>*カ[ゼ]	=*カ[ゼ]
2-1b	*[ミ!ゾ]]	=*[ミ!ゾ]	>*[ミゾ]	>*ミ[ゾ]	=*ミ[ゾ]
2-2	*[オ!ト]	>*[オ!ト]	>*[オト]	>*オ[ト]	=*オ[ト]
2-3	*ヤマ	=*ヤマ	>*[ヤ]マ	>*ヤ[マ]]	=*ヤ[マ]]
2-4	*フ[ネ]	=*フ[ネ]	>フネ	>*フ[ネ]	>フ[ネ]](NW)
2-4	*ソ[ラ]	=*ソ[ラ]	>ソラ	>*ソ[ラ]	=*ソ[ラ](NW以外)
2-5	*フ[ナ]]	=*フ[ナ]]	>フナ	>*フ[ナ]	>フ[ナ]](NW)
2-5	*ア[メ]]	=*ア[メ]]	>アメ	>*ア[メ]	=*ア[メ](NW以外)
2-6	*[[ゴマ	=*[[ゴマ	>*[ゴマ	>*ゴ[マ]	=*ゴ[マ]
3-1a	*[サカ!ナ]	=*[サカ!ナ]	>*[サカナ]	>*サ[カナ]	>サカ[ナ]
3-1b	*[トコ!ロ]]	=*[トコ!ロ]]	>*[トコロ]]	>*ト[コロ]]	>トコ[ロ]]
3-2	*[ア!ヅ]キ	>*[アヅ!キ]	>*[アヅキ]	>*ア[ヅキ]	>アヅ[キ]
3-3	*[チ!カラ]	>*[チ!カラ]	>*[チカラ]	>*チ[カラ]	>チカ[ラ]
3-4	*オトコ	=*オトコ	>*[オト]コ	>*オ[トコ]]	>オト[コ]]
3-5a	*イノ[チ]	=*イノ[チ]	>*[イ]ノチ	>*イ[ノ]チ	=*イ[ノ]チ
3-5b	*アサ[ヒ]]	=*アサ[ヒ]]	>*[ア]サヒ	>*ア[サ]ヒ	=*ア[サ]ヒ
3-6	*ウ[サギ]	=*ウ[サギ]	>ウサ[ギ]	>*ウ[サギ]	>ウ[サ]ギ
3-6	*キ[ツネ]	=*キ[ツネ]	>キツ[ネ]	>*キ[ツネ]	=*キ[ツネ]
3-7a	*ク[スリ]]	=*ク[スリ]]	>クス[リ]]	>*ク[スリ]	>ク[ス]リ
3-7b	*カ[プ]ト	=*カ[プ]ト	>*カプ[ト]]	>*カ[プ]ト	=*カ[プ]ト
3-8(6b?)	*[[ヒスイ	=*[[ヒスイ	>*[ヒスイ	>*ヒ[スイ]	>ヒス[イ]

この変化を全体として見ると、(高起) 下降式は、(高起) 平進式を経て上昇位置が後退し、すべて末位拍が上昇する無核型となった。ただし、「所」は雫石方言と青森市方言がトコ[ロ]]なので(10)の3-1bのように考えたが、音調変化としては3-1aと合流している方が自然ではある。「所」は名詞としての用法(「時はいつそれ、所はどこそこ」)は稀で、前に形容句の付いた「親の～」などのよく使う用法は、両方言とも~do[go]]が普通である²。「所」の

③型は借用語、ないし類推形の可能性がある。

一方、低起式では、語頭2拍以上が低く続く型(○○(-))は、そのあとの上昇を契機として、その上昇直前の1拍を残して前が持ち上がった。*ヤマ > *ヤマ、*オトコ > [オト]コ、*イノ[チ > [イ]ノチ、*アサ[ヒ]] > *アサヒで、京都方言にも起こった変化である。それが〈2〉の段階である。1拍語の「木」も、実際には長めに発音されて追隨したに違いない。こうして成立した、高く始まって語中に下降を持つ型は、その後、〈3〉でその上昇・下降ともに遅れて高い部分が後ろにずれ、*ヤマ > *ヤ[マ]]、*オトコ > *オ[トコ]]、*イノチ > *イ[ノ]チとなった。

同じく低起式で2拍目から上昇した型(○[○(-))も、その上昇の遅れが生じて〈2〉でやはり語頭2拍が低くなっていたものは、追って同様の変化を遂げて〈3〉で語頭が高くなった。〈3〉の段階のいわゆる頭高型は、その後、2・4・5の*[フ]ネ、*[フ]ナなど語頭拍が「弱」のもの、および3・6・7の*[ウ]サギ、*[ク]スリは、ともに直後の拍が「強」(「非弱」)の場合に、上昇・下降の遅れで高い部分が次の拍に移った。その結果が、*フ[ネ]]、*フ[ナ]]、*ウ[サ]ギ、*ク[ス]リである。この環境以外の*[ソ]ラ、*[ア]メ、*[キ]ツネ、*[カ]ブトなどはそのまま残った。北奥諸方言は、今回問題にしている方言に関する限り、これらの特徴を共有するので、この母音の広狭の影響下にある状態になった段階を北奥祖体系と考える³。(3.1節では、分かりやすく、このうち「兜」のみを例示した。)また、上昇の後に2拍(以上)高く続く型は、上昇が遅れて最終拍のみが高くなった。*オト[コ]]などである。

語頭拍が低く始まってすぐその中で上昇する型([[○(-))は、低起式から高起式([○(-))に移行した。「歯」は、高起式に移行してもその1拍語内部での下降は保持された。「巢」は、この変化からは無核型が予想されるが、私の知る限り、北奥諸方言はすべて[ス]]である。どこかの段階で個別的な変化を起こし、「歯」と合流したに違いない。1拍語は有核型が多数派である上に、「酢」が牽引役を果たしたものと見る。同語音語の存在は、むしろアクセントの合流を進める働きをする(拙論2002: 184-185)。ちなみに、東京方言でも、「巢」は以前は無核型で、今でも80代ぐらいまではそれを保持している

人がいるが、主流は①型になっている。ただし、北奥方言では①型で安定して、それを前部要素とする複合語も有核型なので、「巢」が「菌、酢」と合流したのはもっと早かったであろう。(10)の最後の「翡翠」は、他では調査をしておらず、私自身の雫石アクセントに基づいて考えたものであるが、これで無理なく説明はできるので例外ではないものの、借用語である可能性も残る。

4. 昇り核は上げ核に由来するとする説

昇り核を下げ核に由来すると見る私見とは異なり、木部暢子(2008)は「上げ核」からの変化とする説を出しており、児玉望(2017)もこれを支持している。それを検討する。

4.1 木部暢子(2008)の説

木部(2008: 68-71)は、拙論の青森市方言を材料として、かつ、金田一語類(その3-3類を除いたもの)に基づいて、平安時代の京都方言から(11)の変化を経て生じたとしている。表記は(10)までとは違って音韻表記のみで、Hは高起式トーン(語声調)、Lは低起式トーン(語声調)、/´/は上げ核、/˘/は下げ核、/ˆ/は昇り核、Nは狭母音音節、Wは広母音音節をそれぞれ意味する⁴。これは、従来の研究は個々のアクセント型の変化の様相を追うのが中心で、アクセント体系がどう変化したかという観点が弱いという問題があった、とする木部の視点が反映されたものである。

(11) 青森市方言アクセントの形成過程(木部)

	〈平安京都〉	→	〈前青森〉	=	〈現代青森〉
2拍名詞1類	H○○	→	○○	=	○○ (庭・音)
2類	H○○	↗			
3類	L○○ _˘	=	○○ _˘	→	○ ^ˆ ○ (山)
4類	L○○○	→	○○○	→	○ ^ˆ W (笠・雨)、○ ^ˆ N (松・春)

- 5類 L〇、〇¹ ↗
- 3拍名詞1類 H〇〇〇 → 〇〇〇 = 〇〇〇 (桜・小豆)
- 2類 H〇〇¹〇 ↗
- 4類 L〇〇〇、 = 〇〇〇、 → 〇〇¹〇 (頭)
- 5類 L〇〇、〇 = 〇〇、〇 → 〇〇¹W (心)、〇¹〇N (命)
- 6類 L〇、〇〇 → 〇、〇〇 → 〇¹W〇 (兎・卵)、¹〇N〇 (狐・兜)
- 7類 L〇、〇¹〇 ↗

これを見る際に留意すべき点がある。今、仮に高い拍を●で、核を担う拍を下線で示すと、私の立場では、/●]/→/[●/という、担い手は同じn拍目のままで/]から/[/の体系に変わったとする「核の種類の変化」であるのに対して、木部の場合は、たとえば〇〇、●→〇〇¹● (この●はW) の変化は、上昇位置は同じままで、n拍目にある上げ核が、n+1拍目の昇り核に変質したとするもので、核に着目すれば「核の種類と位置の変化」である。この点を混同しないようにしなければならない。

また、前述のように弁別特徴のみを記した音韻表記なので、音調型は記されていないことも頭に置いておく必要がある。たとえば、<現代青森>の3-1・2/〇〇〇/の音調型は〇〇[〇であることは調査をした私は知っているが記載はなく、<前青森>の/〇〇〇/になると無核型である以外は私にも分からない。この後すぐ問題にするように、非弁別的な下降についても、またそれと深く関連する言い切り形/接続形の別も、そこには表記されていない。

さて、この木部説のポイントは、<平安京都>の「下げ核」(ˊ)がすべて消失しているとする点である。これにより、2-1・2類、2-4・5類、3-1・2類、3-6・7類のそれぞれが合流する。ここまでは、私の説と基本的に異ならない。しかしながら、平安京都の「上げ核」(ˊ)は、その直後以降をすべて高くする性質を持っていたと考えられる。それをそのまま受け継ぐと、たとえば3-6・7類は、<前青森>段階の〇、〇〇は〇[〇〇であって、どこにも「下降」はなかったはずである。そうすると、その下降のない状態から、〇、〇〇→〇¹W〇の変化によって成立した<現代青森>のウ[サ]ギ、やウ[サギ]アル、の

下降〔〕がどうして出てくるかが是非とも知りたくなるが、(後者の例は木部2008段階ではまだ報告がなかったので致し方ないにしても)その説明は何もない。非弁別的な特徴ゆえに表記しなかったことは分かるものの、現実の変化を追う上ではこれが一番の問題点となる。もとより、ここでは下降そのものの存在を問題にしており、母音の広狭に伴う位置の問題を取り上げているわけではない。この下降の由来の問題は、青森市方言の有核型のすべてに関わる事柄である。その点、私見では、元々下げ核を持っていたものが1拍卓立型を経て昇り核に変わったとするので、言い切り形に出てくる下げの特徴は最初から持っていたことになる。

次に、狭母音音節Nが昇り核を担わなかった点に関しては、その自立性の低さから核を担うことができず、その場合は昇り核が1つ前の音節にずれる〇」N→*〇」N→「〇Nという変化が起こったとする。Nが弱くて核を担いにくいとする説は賛成であるが、こういう状況で核が前(語頭寄り)にずれるという変化の実例を私は知らず、不自然さは否めない(これについては、4.2節でも再度取り上げる)。

また、氏が対象としている青森市方言を離れて雫石方言に目をやると、ここでは/[アメ、[カサ/であり、〇Wの一種のWWでも、つまり2拍目が弱いという音声的根拠がないときでも、木部説では前への移動が起こったことになってしまうという問題もある。

さらに、木部によると、<前青森>で末尾音節に上げ核を持っていた2-3の〇〇」と3-4の〇〇〇」は、末尾の上昇を実現するために末尾音節に昇り核を持つ〇」〇(山、網)、〇〇」〇(頭、光)にそれぞれ変化した。この変化は、「[上げ核→昇り核」とは質的に異なる変化」(p. 71)なので、母音の広狭が関与しなかった、と述べる。しかしながら、元低かった語末拍が高くなる変化は、「末尾の上昇を実現するために」とあるが、これでは、自らも認めるように異質な変化を導入することになって全体の変化の一貫性がなくなる上に、なぜそうする必要があったのかの理由も不明である。核の有無による違いがあるとは言え、津軽では無核型の語末拍が高くなる以上、わざわざそれに近くなる変化を、しかも前の段落で問題にしたように逆方向的に前の方が高くな

る特別な形で起こす必要があるのか、然るべき説明が必要と考える。また、「質的に異なる変化」だからと言って、それで母音の広狭の非関与がきちんと説明されたことになるのかという点にも疑問が残る。

この点に関して私の立場ではどう見るのかと問われるかもしれない。それは、(10)の2-3では*[ヤ]マ>*[マ]、3-4では*[オト]コ>*[トコ]という<3>への変化は母音の広狭を問わず起こったものだった。他の例を補えば、*[イ]ヌ>*[ヌ]、*[ヒカ]リ>*[カ]リである。その結果、語末拍は広狭にかかわらず一律に核を持つようになった。それに対して、2-4・5の*[フ]ネ>*[ネ] (NW)、3-6・7の*[ウ]サギ>*[サ]ギ (〇WO)、*[ク]スリ>*[ス]リ (〇NN) の変化は、その次の北奥祖体系になる段階で生じたもので、そこでは母音の広狭（厳密には強弱）が関与したためと考える。すなわち、変化の時期の違いが、母音の強弱条件の関与の違いとなって出ているものと見る。

本節の木部論文は、次の児玉論文でも取り上げられている。その児玉説に対して述べる私見の中には、木部説にも共通に当てはまる点が多く含まれる。

4.2 児玉望 (2017) の説

この論文は、独自の考えに立って、これまでの説とは大きく異なる日本語アクセント史を構想した長編である。日本祖語（日琉祖語）のアクセント体系はアクセント核がなく、7種類の語声調を持った体系であったと想定する。やがてそれから「上げ核」（児玉はこれをL*と表記。なお、昇り核は[H*]の位置対立が発生し、本稿との関係に限定して言えば、それが青森市方言に関する木部仮説へと繋がって行く流れで論が展開されている。

ただし、その論は、通説と著しく異なるのみならず、様々な仮説が導入されて話が多岐にわたり、極めて複雑になっており、その全体像を正確に追っていくのは容易なことではない。ここでは本稿に関連する事柄で、私見が批判の対象となっている部分に事実上絞って取り上げることにする。私の側の誤読を避けるために、長くなるが、できるだけ原文を引用する。

まずは、木部暢子 (2008) に触れている部分から見ていく。これについて

児玉 (2017: 14) は「上げ核と昇り核は共に上昇核であり、上げ核の昇り核化とは上昇開始の早めという、通常は「自然な音調変化」とはみなされない変化である。」と説き始める。そして、その「上昇開始の早め」(私の用語では「上昇の早まり」)として木部が想定しているものには(12)の2種類があり、(12a)の完結が先行するとみられる、とする。(この時間的前後関係は4.1節の末尾に述べた私見と異なるが、枠組みの違いとしてこのまま先に進む。)

(12) a. 上げ核の上昇の発現すべき音節の母音が狭い場合

b. 語末の上げ核

この(12a)の変化を、木部は「核が一つ前の音節にずれた」とするが、「ずれたのは上昇開始位置であって、核の位置自体は変わらない」と児玉は述べる。やや分かりにくい表現であるが、先の表記法を借りれば、 $\underline{\circ}_i \bullet > \bullet N$ ということになろう。もっとも、木部は昇り核になった後の「 $\circ N$ 」の位置を \circ 「Wとの関係において問題にしているのに対して、児玉は上げ核と昇り核の位置を問題にしている可能性はある。

これに続けて「むしろ、この上昇開始の早めによって、上げ核体系では存在しないはずの語頭音節のHが出現したため、昇り核と解釈されるようになったとみるべきであろう。」とある。これが<前青森>の段階での話ならそうなるかもしれないが、仮に上げ核一般の話だとなると、山梨県奈良田方言など、[ア]サ[ガ]オガ (/アサガオ/)、[ア]オゾ[ラ]ガ (/アオゾラ/)、[カ]ミナリ[ガ] (/カミナリ/) のように、上げ核でありながら語頭にHの出る方言があることは一言述べておきたい。

続いて、「上げ核の上昇の発現すべき音節の母音が広い場合は音調の上では変化がなかったが、核の種類が上げ核から昇り核に変わったために核の位置がひとつ後ろにずれた」とあるのは、(11)の直後に書いた私の注記と同じことを述べているものと見る。

問題はその後である。自ら「通常は「自然な音調変化」とはみなされない変化」と書いた「上昇開始の早め」について、「(12a)のタイプの弱いモーラ

の位置への上昇が早められることは、東京方言の句音調の実現で観察されるように、音調変化しては不自然なものとはいえない。」と自説を補強している点である。東京方言をこのように見る人は多いが、私はそうは考えていない。すでに拙論（2009, 2017b: 353）等で述べたように、[コーリ、[アイダ、[サンマなどは、すべてサ[カナの段階になった後でコ[ーリ>[コーリのように上昇が早められたのではない。元々*[コーリ、*[サカナ等であった段階で、2拍目が「非弱」のものに「上昇の遅れ」が生じてサ[カナになったが、そこが「弱」のものは元のまま[コーリなどで残ったと考えるからである。これはかなり古くから持っていた考えである。

また、「(12b)のように上げ核体系の語末音節に上昇調が出現しやすいのは、下げ核体系の語末核型で下降調が現れる場合と対称的な関係にあると考える」とする点も、共時的に「対称的な関係」という点では同意するが、その真意が、通時的に(-)○'は(-)○]]>(-)○]となり、(-)○]は(-)[○>(-)○]と変化すると見るところにあると仮にするならば、やはり私の考えとは異なる。前者には異論がなく、[○]○>○[○]]>○[○]、[○]○>[○○]]>[○○]などの変化はよく起こっている。しかし、後者は、語頭を除き、むしろ-[○>-○]で上昇が消えてしまう方が自然だと見る。また、前者の例も、すぐ上に見たようにその-○]]の前は-]○]だったと見られ、要するに、通時的には「上昇・下降の遅れ」の方が一般的に起こるものと考え。

この後に、「昇り核を下げ核から高核【ここは1拍卓立型と読んで構わない】を経て発生したとする」(pp. 14-15) 私見に対する批判が展開される。「高核を経ての方向性の逆転自体は双方向的であると考えられるので、昇り核から下げ核ではなく下げ核から昇り核の変化であることを論証する必要があるが、上野（1989, 1992）の次の二つの論点は必ずしも説得力があるとはいえない」とする。

この段階でまず私見を挟むと、変化の「可能性」としては「双方向的」だと私も考えるが、その「蓋然性」には大きな差があるものと見ている。昇り核から下げ核への変化は、私の限られた知識の範囲では思いつかない。1拍卓立型で、上昇と下降のいずれが弁別のか決めがたい例はありうる——それ

ゆえに「高核」を提案したのであった——が、一旦昇り核になった後に下げ核に変化するの、そのプロセス自体が考えつかないので、そもそも言及をしなかったものである。ましてや、本稿で言う北奥方言が昇り核であることは異論がないはずであるから、どのような論の展開を求められているのか想像が付きにくい。兎玉自身が昇り核から下げ核への変化を主張しているのではない以上、この問題はこれで切り上げて先に進むことにする。

本題に戻って、兎玉(2017: 15)が問題視する2つの論点とは、次の(13)である。これもそのまま引用する。

(13) A：零石方言では句末の音調形や、次末文節の焦点形として、核の後ろで下げ核と同様の下降のある形が現れ、古い音形の残存とみることができる。

B：零石方言で有核の非句末文節に次文節の文節頭の(昇り)核が接続するとき、上昇せずに平進【無核型については略】となるのは、本来、非句末文節での核に続いていたLが文節末まで実現しなくなる変化のなごりである。

こうまとめた上で、「Aのイントネーション形は、古い音形の残存であるかどうかとは無関係に、共時的には昇り核体系で許容される(先行する上昇を損なわない)音調形であるといえ、先行段階で下げ核であった決め手にはならない。」(p. 15)とする。

私としては、弘前方言の例も加えて、どちらの方言でもその下降の出現がでたらめではなく、上昇と下降が明確に使い分けられていて「許容」というレベルではないことと、連続下降もあることを示し、その下げ核から昇り核への変化の過程も提示したつもりである。それを論拠不十分とするならば、拙論の問題点を具体的に指摘し、固定的な下降がなぜ現われるのかを批判者の立場から明示的に記した代案が必要と考える。しかし、兎玉論文ではそもそも「下降」自体が一切示されておらず、上げ核から昇り核に移行する際にどのようにして下降が出てくるかの言及もないままに⁵、「共時的には昇り核

体系で許容される（先行する上昇を損なわない）音調形である」と言われても、あまりにも茫漠としていて、私としては対応に窮してしまう⁶。

Bについては、(14)の拙論の例（児玉式表記版）を取り上げ、(14a)の拙案の他に、「(14b)のような上げ核をもつ祖形からも同じ結論が導かれる。」と言う。ここに、下げ核は○*、上げ核は○*[で示されている。

(14) [テ*ト [サ*ルト [カ*プトト [コ*スモス (“” は文節境界)

a. テ*ト[サ*]ルト[カ*]プトト[コ*]スモス 【冒頭は [テ*] が私の意図するところ】

b. テ*[ト]サ*[ルト]カ*[プトト]コ*[スモス

今、(14)の句末の[コ]スモスの「下降」は問題にしないことにして、ここでも(14b)の上げ核からの上昇の早まりによって説明できるとするのであろう。しかし、上げ核そのものの方言がまだ多く見つかっておらず、ましてやその段階からの世代的な変化を記録したものは奈良田方言を扱った拙論(1976a: 30-31)しかないだろうと思われるが、少なくともそこで実証されているのは——すなわち、比較研究における研究者の推論ではなく、実際に観察されたのは——、上げ核で上昇した後の「下降の遅れ」であって、「上昇の早まり」ではない。具体的に言えば、[ア]サ[ガ]オガ>[ア]サ[ガオ]ガという変化である⁷。

それを考えると、(14b)から起こった可能性は推測段階にとどまるのではないか。たとえ不十分だとの評価を受けるとしても、それなりの論拠を示した(14a)に比べたら、(14b)からの変化の蓋然性ははるかに低いという私の見解に変わりはない。

付け加えると、奈良田方言や伊豆神津島方言の「上げ核」体系も、私見では「下げ核」体系から「上昇・下降の遅れ」によって生じたものであり（拙論2011, 2012）、特に神津島の場合は、片や男性高齢層、片や女性および若年層との差として実際にその下げ核>上げ核の変化が観察できることも見逃せない点である（調査資料は平山輝男1963による）。さらには、昇り核や上げ核

方言（拙論1977の埼玉県蓮田方言なども含む）の近くに、南東北から北関東を中心にいわゆる曖昧アクセントや無アクセント方言が分布していることも、これらの核が「下げ核」からの二次的な変化による派生であり、大局的に見れば無アクセントの方向に一步近付いていると見ることができる。これもまた、昇り核や上げ核が下げ核に由来するとする間接的な理由でもある。

さらに補うならば、私の知る限り、最も広く一般的に見られる「下げ核」の方言においても、「上昇・下降の早まり（前進）」が実証される例はごくわずかしかない。京都方言の文献資料から分かる[○○]○ > [○]○○（頭、男、鏡など）、金沢方言の世代的変化に現われた語末の「有声音+狭母音」という弱い環境における(-)[○○] > (-)[○]○（虻、蟹、雉、猿、鳥；鎖、畳など）、近隣の伊豆方言などとの比較研究から推定される東京方言特殊拍における*カ[イ] > [カ]イ（貝）、*キ[ン] > [キ]ン（金）、*キ[ノー] > キ[ノ]ー（昨日）など、限られた環境における変化だけであり（拙論2012、およびそこに引いた拙論参照）、しかも、語末の「弱」環境を除けば、高知市の[○○○]○ > [○○]○○（中井幸比古2002: 392）も含めて不徹底で例外も多い。何よりも、いずれも「元からある他の型との合流」という形で起こっているという点が決定的に重要である。諸方言に見られる、諸型を通して基本的に合流なしに一斉にずれたと見られる「上昇・下降の遅れ（後退）」の現象とは明らかに異なるのである。

以上の結論として、北奥方言の「昇り核」が「上げ核」に由来するとする木部暢子説・児玉望説は、ともに、その昇り核方言に現実に観察される「下降」が全く取り上げられておらず、その由来も不明であることと、「上げ核からの上昇の早まり」という変化が自然な起こりやすいものとは思われない、という2点において、私としては首肯することができない。

稿を終えるに当たっての付記であるが、児玉（2017: 31）はその終わりのところで、日本語アクセントの祖形として私が従来の高起平進式に代えて下降式を立てたことについて、「非常に重要な仮説」としながらも、「下降調から高平調への変化は起きやすい変化であるが、高平調から下降調への変化は起きにくいという理由付けで、祖体系に下降調を再建することは、アクセント核のな

い無核型を語声調の一種とみなす立場では首肯できない。」と述べている。昇り核とは話題が異なるので、これについては次の点だけを記すにとどめる。

兎玉の「アクセント核のない無核型を語声調の一種とみなす立場」とは前提が異なるであろうが、私の下降式音調は有核/無核を問わず被さる特徴で、アクセント核と併存するものと位置付けている。また、音節声調ならば確かに高平調が下降調に変わる変化もよく起こるが、私の下降式音調はそれとは異なっていて、それが被さるアクセント単位の長さを問わず、かつ基本的に2拍目の後で半下降が生ずるというものである。可変的な長さの中の「特定の位置での動き」を「形」の一部として含むものである（もとより、アクセント核における「位置」の対立とも異なる）。単なる下降調ではないその「特有の形」が、高平調から容易に生じ得るものとは考えられない、という意味である。単に末尾が弱まって下降するような次元のものとは異なるとする主張である。

【付記】本稿は、2018年8月4日と5日に東京言語研究所で行なった集中講義「日本語のアクセントをどう捉えるか」の中で5日の日に話した内容の一部に、兎玉望(2017)の検討も追加して補訂したものである。本稿はJSPS 科学研究費19H00530(代表者:窪蘭晴夫)による研究成果の一部でもある。同時に、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー:窪蘭晴夫)、並びに「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(プロジェクトリーダー:木部暢子)の研究成果も兼ねる。

【参照文献】

- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別の特徴」『言語の科学』(東京言語研究所)6: 23-84.
上野善道(1976a)「奈良田のアクセント素の所属語彙」『文経論叢』(弘前大学)11(3): 1-32.
上野善道(1976b)「弘前アクセントと鏡像関係」『学園だより』(弘前大学)35: 4-5.
上野善道(1977)「日本語のアクセント」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語5 音韻』、岩波書店: 281-321.
上野善道(1980)「アクセントの構造」柴田武編『講座言語1 言語の構造』、大修館書店: 87-134.
上野善道(1986)「青森市方言の動詞のアクセント」『日本海文化』13: 1-51.

- 上野善道 (1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』、明治書院: 178-205.
- 上野善道 (1991)「青森市方言の形容詞のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 19: 45-81.
- 上野善道 (1992)「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-13.
- 上野善道 (1993)「青森市方言の複合名詞のアクセント規則(1)」『東京大学言語学論集』13: 1-144.
- 上野善道 (1996)「アクセント研究の展望」『音声学会会報』211: 27-34.
- 上野善道 (2002)「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座第3巻 発音』、明治書院: 163-186.
- 上野善道 (2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 上野善道 (2009)「通時的にしか説明できない共時アクセント現象——句頭の上昇と語音との関係——」『月刊言語』38(2): 74-81.
- 上野善道 (2011)「上げ核」の由来——奈良田アクセントの成立過程——、坂詰力治編『言語変化の分析と理論』、おうふう: 614-599. 【p. 605 (8a) 〈4〉の「>」は「=」、逆に p. 604 (9b) 〈3〉の「=」は「>」のミス。】
- 上野善道 (2013)「論文紹介: UWANO(2012)」『国語研プロジェクトレビュー』4(2): 161-163. 【UWANO(2012)の日本語による要約で、その正誤表も含む。】
- 上野善道 (2017a)「青森県南部方言の名詞のアクセント資料」『国語研究』80: 1-22. 【p. 18 「憎らしい」の右側 2 地点、語形と 5 の間を開ける。】
- 上野善道 (2017b)「長母音の短縮から核が生ずるか——服部仮説を巡って——」『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 94: 345-363.
- 上野善道 (2017c)「青森県津軽方言のアクセント資料」『ことばとくらし』(新潟県ことばの会) 29: 71-91. 【p. 74 [補記]の 4 行目、「1949」年生まれは、「1929」年生まれ。p. 88 五所川原方言「雀」のアクセント「2」は「1」の入力ミス。】
- 木部暢子 (2008)「内的変化による方言の誕生」小林隆編『方言の形成』、岩波書店: 43-81.
- 木部暢子 (2016)「アクセント史」高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸『音韻史』岩波書店: 69-118.
- 児玉望 (2017)「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』16: 1-34.
- 高山林太郎・中澤光平・大槻知世 (2012)「青森市若年層のアクセントについて——ダウンステップ、低平化、高平化——」『第26回日本音声学全国大会予稿集』19-24.
- 中井幸比古 (2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 平山輝男 (1963)「方言アクセントの型の推移について——伊豆神津島方言を中心として

——』『人文学報』（東京都立大学）32: 105-127.

IGARASHI, Yosuke (2006) "A preliminary analysis of the relation between lexical pitch accent and prosodic phrasing in Goshogawara Japanese." 『第20回日本音声学会全国大会予稿集』 141-146.

UWANO, Zendo (1999) "Classification of Japanese Accent Systems" in Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium 'Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*, Tokyo: ILCAA, 151-186.

UWANO, Zendo (2012) "Three types of accent kernels in Japanese", *Lingua* 122 (13): 1415-1440.

UWANO, Zendo (2018) "Accentual Neutralization in Japanese Dialects" in H. Kubozono & M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, Mouton de Gruyter 129-155.

注

- 1 青森市方言は、話者佐々木隆次氏に20年以上に渡ってお世話になったが、2002年に66歳で他界されたので確認できず、その後も同市の調査をする機会は得ていない。
- 2 接続助詞の「(~した)ところで」も、少なくとも雫石方言では「(~sita) do[go]~de」である（青森市は資料不明）。接続詞「ところで」なら、雫石③型、青森④型。なお、祖体系の類を別にしたのは、東京方言などで「所」は①型なのに「その〜で」では③型になることに基づく。「上、下」①型なども「その〜に」では②型になる。また、関西方言で「の」が付くときの[ウエ]ノ、[シタ]ノが知られている。それで「溝」と同じく、*[ウエ]]などを想定した。ただし、今日では時空の関係を表わす意味の単語の特定の用法にのみ残っている。
- 3 たとえば青森との県境で沿岸部にある岩手県^{くのへ}九戸郡^{ひろの}洋野町の方言ではこの移行は起こっておらず、それを含めると、*[ウ]サギ、*[キ]ツネ、*[ク]スリ、*[カ]プトという一段階前の〈3〉の状態を北奥祖体系と見る必要がある。2-4・5の*[フ]ネ、*[フ]ナについても同様である。しかし、本稿はそこまで範囲を広げずに述べる。もとより、祖体系とは、比較対象をどこまで含めるかによって変わる相対的な概念である。
- 4 原図の2.24と2.25を合わせて示した。→とノで示したのは両型が合流する変化を意味する。できるだけ原図に忠実に意図したものの、私のパソコン能力ではこれが限度なので、疑問の点は原図を参照願いたい。ちなみに、木部暢子（2016: 87, 101）では平安京都（名義抄体系）の解釈が大きく変わっていると見られるが、青森市方言との関係が述べられていないので、ここでは取り上げない。なお、(11)に関連して2点補足しておく。そこでは木部は「○N○としているが、おそらく簡略化したものであろうが、「薄、鼠、葉」など、2拍目が「狭」でも3拍目が「狭」だと②型になるので、「○

- NWとするか、私の「弱」の概念を用いて「○弱○とする方がよい。今一つ、津軽方言の「心」は私の調べた限り③型で木部論文でも正しく引用されているが、拙論（2012: 1431）の(23)の弘前方言に「心」を②型として書いたのは、雫石方言では②型に言うのに引かれた私の書き間違いであった。両方言とも語例を揃えるために、「命」に変える。
- 5 ここまでは木部説も同様であるが、見玉式表記の場合は、木部のような核表記のみではないので、Lを組み込む余地はあるものと見られる。たとえば、その「東北外輪祖体系」（pp. 15-16）は次のようになっているからである。類を若干簡略化して3拍語のみをまとめて示す。3-1・2 LLL、-4 LL[H*、-5a・b L[H*H~LL[H*、-6・7 [H*HH~L[H*H。昇り核（[H*）の体系と見ていることが分かる。このやり方なら、必要に応じて[H*HLのような表記が可能だと考えられる。（なお、上記の「~」の意味の説明は何も書かれていない。）
- 話が逸れることをおそれつつ関連して述べると、そもそもこの祖体系は、「昇り核における文節関与性が何に由来するのか」という見玉自身の問い掛けの後に唐突な感じが出てくるが、無核型のLLLの設定までは、賛否は別にして付いて行けても、その先の、無核型のLを含むこの体系と文節関与性とを結びつける論理が私には全く不明なので、その点へのコメントは控える。
- 6 その後、本稿提出直前に思いついたのであるが、見玉の考えは、あるいは次のようなものであろうか？——昇り核は、その由来とは無関係に、「への字型」をなす文末への音声衰微の中で文末に行くほど上昇が保ちにくくなって下降に転じやすく、転じてもその前の上昇は損なわれないので、共時的にそういう状況は許容される、と。しかし、仮にそう考えた場合、文末の衰微によって上昇の弱体化までは起こるとしても、正にその位置で下降に反転するのは自然ではなく、ましてや意味上の強めである焦点形においてわざわざ下降に転ずるとは考えにくい。
- 7 奈良田方言では、昭和30年代の少年層でアクセント変化が起こっていて、たとえば[ア]サ[ガ]オ(ガ) > [ア]サガ[オ](ガ)のようなアクセントの山の後退が見られる、と2人の研究者によって独立に報告されたことがある。しかし、私が該当代の数人の話者（先行報告に出ている話者も含む）に確認調査をしたところでは、そのような現象は観察されなかった。観察されたのは、上の世代では上げ核の後の上昇が原則1拍であるものの時に2拍に及ぶことがあったのが、若い世代ではそれがかなり固定的に出るというものであった。当初、この現象は謎だとしたが、先行研究の報告は、奈良田方言で特徴的な抬頭現象（二山型）には着目したものの、その他は東京方言的にその下降の位置にのみ注目した結果としての不備に違いない、と今では考えている。ともあれ、ここで実際に観察されたのは「下降の遅れ」（仮に先行報告が正しかったとしても「上昇・下降の遅れ」）であって、「上昇（・下降）の早まり」ではないことに注意したい。